

# 高校階層構造と社会階層・進路・学習意欲

## —「高校生文化と進路形成の変容（第3次調査）」より—

- |                                |                       |
|--------------------------------|-----------------------|
| ○堀健志（日本女子大学非常勤）                | ○岡部悟志（ベネッセ教育研究開発センター） |
| 樋田大二郎（青山学院大学）                  | 岩木秀夫（日本女子大学）          |
| 耳塚寛明（お茶の水女子大学大学院）              | 苅谷剛彦（オックスフォード大学）      |
| 大多和直樹（東京大学）                    | 金子真理子（東京学芸大学）         |
| SIM CHOON KIAT（日本大学・日本女子大学非常勤） |                       |
| 中西啓喜（青山学院大学大学院）                | 平木耕平（東京大学大学院）         |

### 1. 問題関心

1970年代半ばに「高校教育の拡大」が終焉してから、3～40年になる。この間、高校教育の選抜配分機能はどう変化してきたのか。また、高校教育の正統性への懐疑はどの程度強まっているのか。本報告の目的は、1979年度・1997年度・2009年度の3次にわたってほぼ同一の対象に対してほぼ同一の方法によって実施された調査を用いて、これらの問いに取り組むことにある。

#### 1) 高校の選抜機能とトラッキング・社会階層

学校の選抜機能に関する分析は、(教育)社会学における古典的なテーマであり、数多くの研究が蓄積されてきた。そこで明らかにされてきたのは、メリトクラティックな選抜という装いのもとで作動するノン・メリトクラティックなプロセスである。中学卒業時点における学業成績によって一元的に序列づけられた高校階層構造が「トラッキング」のメカニズムによって捉え返されたのも、ひとつには、こうしたノン・メリトクラティックな選抜プロセスを明らかにするためであったと言える。生徒たちがいかなるランクの学校に進学するかは、本人の学業成績だけではなく出身背景（社会階層）によっても左右される。そして、高校入学後は、学校ランクに応じて異なる生徒文化を生き、学校ランクに応じて異なる進路を自発的に選択する——こうした選抜プロセスをつうじて、教育機会の社会階層格差が産出されるとともに正当化されることが明らかにされてきた。

本報告もまたこうした関心を踏襲して、社会階層という属性要因が高校階層構造における選抜プロセスに及ぼす作用や、トラッキングのメカニズムが、この30年の間にどう変化したのかを分析する。

ところで、この間、高校を取り巻く環境は大きく変化している。第1に、少子化と高卒労働市場の縮小により大学進学率が上昇するなかで、大学

進学希望者が多様化していると考えられる。第2に、少子化にもかかわらず、高校の定員枠の硬直性により、一部の学校では入学者が多様化していると考えられる。第3に、大学入試の多様化（推薦など）にともなって、大学進学希望者の形成する文化も多様化すると考えられる。第4に、日本社会における職業構造・学歴構造の変容にともなって、保護者の高学歴化・ホワイトカラー化が進展しており、子どもの教育についての高学歴志向が強まっていると考えられる。第5に、一人親家庭の増加や企業社会の再編にともなう家計の不安定化により、選抜プロセスにおける経済的要因が及ぼす影響の強まりが考えられる。

以上のような変化を踏まえて、高校階層構造における選抜プロセスの変化を捉えるために、本報告では、高卒後の志望進路および学習へのコミットメントの変化に注目する。志望進路だけではなく、学習へのコミットメントに注目するのは、上で述べたように大学進学希望者・大学入試が多様化していることが選抜プロセスに及ぼす影響をより微細な観点から捉えるためである。

#### 2) 単線型高校階層構造の正統性

なぜ、義務教育でもないのに高校に通って勉強しなければならないのか——「高校教育の量的拡大」の終焉は、拡大の過程において掻き消されてきた、こうした問いへの対処を迫る。1970年代後半に完成した高校階層構造は、学力の面でも進路の面でも多様な生徒を、高等学校という同一の機関において教育を施す「単線型」であった。それゆえに、多様な生徒たちから学習指導・教科指導に対する関与を調達すること、ひいては学校の様々な指導・活動への関与を調達することには困難がつきまとう。このような意味で、日本の高校教育制度は、単線型であるがゆえに正統性の調達に困難を抱え込んできたと言える。

たしかに、こうした困難は高校階層構造によっ

て対処されてきた側面がある。また、90年代以降に推進された個性化・多様化を中心理念とする教育改革もまた、生徒の多様性、あるいは、単線型高校教育の正統性の揺らぎに対応する試みであった。しかし、単線型であるかぎりには教育課程編成の多様化には一定の歯止めがかけられることとなり、共通部分を設けざるをえない。それゆえ、単線型高校教育は、高校階層構造の完成期以降——すなわち、ほぼすべての子どもが高校へ進学し、消極的な理由による高校進学が常態化した1970年代半ば以降、その正統性が（潜在的にはであっても）問われ続けてきたと言える。

それでも、学習のインセンティブがそれなりに働き、単線型高校教育の正統性が全面的に問われてこなかったのは、一つには、企業社会が新卒労働市場を用意してきたからであろう。さらには、学歴や成績といった一元的でメリトクラティックな基準が人生をそれなりに左右するという表象が分有されていたからであろう。緻密な階層構造をなす単線型高校教育は、こうしたメカニズムの一端として機能することによって、生徒たちから学校ランクに応じた学習へのコミットメントを調達するとともに、「(教育) 機会の平等」幻想をふりまき、階層秩序の正当化にも寄与してきた。

しかし、高校階層構造の完成から3~40年がすぎ、学校から職業への移行における極めて大きな構造変容ともなあって、「単線型」高校教育は、これまでは周辺化してきた正統性をめぐる問いに直面せざるをえないと考えられる。とりわけ、卒業後進路の保証が難しい高校、あるいは「学校経由ではない」進路形成を行う生徒の多い学校では、学習へのコミットメント、さらには学校へのコミットメントを調達することは一層困難となろう。

こうした関心にもとづいて、本報告では、学習へのコミットメントの変化について検討する。

## 2. 調査概要

本報告は、1979年度に実施した「高校生の生徒文化と学校経営」調査(79年調査)、1997年度に実施した「高校生文化と進路形成」調査(97年調査)、2009年度に実施した「高校生文化と進路形成(第3次)」調査(09年調査)によって得られたデータを用いている。97年調査および09年調査では、79年調査の対象校と同一の学校に加えて、それらの高校と同一地域にある高校をその時々に関心に応じて新たに追加して、ほぼ同じ内容の教員対象聞き取り調査と、生徒・教員対象質問紙調査を実施した。ただし、この報告では、変化を明らかにすることを目的として、79年調査より一貫して対象となっている11校のうち、保護者の職

業や学歴に関する情報が揃っている9校のみを分析対象としている。

### 1) 調査対象県および分析対象校

- ① A 県(東北地方): 上位校(普通科)1校、中位校(普通科)2校、専門校1校。
- ② B 県(北陸地方): 上位校(普通科)1校、中位校(普通科)2校、専門校2校。

### 2) 調査対象者および調査内容

- ① 学校調査(聞き取り調査): (略)
- ② 生徒対象質問紙調査: 各高校2年生4クラス以上に対する質問紙調査。79年11~12月、98年1~2月、2009年12~2010年2月に実施。
- ③ 教員対象質問紙調査: (略)

### 3) 分析対象者票数

各年度とも1校につき125名を無作為に抽出し、合計3375名。

### 4) 分析対象データの概要

#### ① 高校ランクと生徒の中学成績(%)

		上位校 (普通科)	中位校 (普通科)	専門校
1979年	中学成績・上位	84.4	42.4	2.7
	中学成績・中位	11.5	48.0	29.9
	中学成績・下位	4.1	9.6	67.4
1997年	中学成績・上位	85.4	39.1	3.7
	中学成績・中位	12.2	47.6	25.4
	中学成績・下位	2.4	13.4	70.9
2009年	中学成績・上位	70.7	38.3	1.3
	中学成績・中位	15.3	44.5	23.2
	中学成績・下位	14.1	17.2	75.5

注) 中学成績は、中学卒業時の成績を9段階でたずねた設問の回答にもとづき3分割した(分割の仕方は3つの年度とも同様)。

#### ② 社会階層: 父職・父学歴・母学歴(%)

		父ホワイト	父非ホワイト
父職	1979年	53.2	46.8
	1997年	64.5	35.5
	2009年	64.1	35.9
		父四大卒	父非四大卒
父学歴	1979年	19.2	80.8
	1997年	34.5	65.5
	2009年	43.4	56.6
		母四大卒	母非四大卒
母学歴	1979年	6.4	93.6
	1997年	14.2	85.8
	2009年	20.6	79.4

注) 父職は、専門・技術、管理、事務、販売の合計をホワイトとした。

### 5) その他

① 本調査は、日本学術振興会の科学研究費補助金の助成を受けて実施したものである。〈基盤研究(B) 高校生文化と進路形成の変容(第3次調査) 単線型教育体系における多様化政策の課題〉(代表・樋田大二郎)。

② 調査の概要については、当日発表資料または、本要旨収録に掲載されている以下の報告の要旨を参照されたい。樋田大二郎ほか「単線型メリトクラシーパラダイムの再考—「高校生文化と進路形成の変容(第3次調査)」より—」。

(以上、堀健志・岡部悟志)

### 3. 高校生が抱く卒業後の進路志望の変化

ここでは、生徒の卒業後の進路志望に着目し、79年・97年・09年の3時点でどんな変化が生じたのか、またその背景としてどんな要因が考えられるのかを議論する。以下では、いずれも2. 調査概要にある9校を分析対象としている。

#### 1) 進路志望の経年変化

生徒の進路志望をめぐるこの30年間の大きな変化は、①国公立大を中心とする大学進学志望の増加、②就職志望の減少の2点である(表3-1)。

表3-1 進路志望の経年変化(年度別、%)

	1979年	1997年	2009年
国公立大学	47.8	52.9	62.3
私立大学	11.8	10.5	7.6
短期大学	4.4	4.3	2.2
専門学校・各種学校	8.4	11.3	8.8
家事・手伝い	0.5	0.4	0.1
就職	26.5	16.9	16.0
フリーター	—	—	0.6
その他	—	—	1.6
無回答	0.6	3.8	0.7

注) 79年調査、97年調査には「フリーター」「その他」という選択肢がない(表3-2、3-3も同様)。

#### 2) 高校ランクと進路志望

次に、高校ランク別に生徒の進路志望の変化を見てみよう(表3-2)。全体的に、1)で確認した傾向が、学校ランクを超えて確認することができる。しかし細かく見てみると、高校ランクによって傾向が異なる。特徴的なのは、国公立大進学に関して、上位校(普通科)の志望比率が8~9割の高水準で安定的に推移しているのに対して、中位校(普通科)の志望比率が6割→7割→8~9割と急上昇している点である。一方で、97年に就職志望が半数を切った専門校では、大学進学志望も増加傾向にあったものの、近年では中位校(普通科)ほど大きな変化は見られない。

表3-2 進路志望の経年変化(ランク・年度別、%)

	上位校 (普通科)	中位校 (普通科)	専門校
1979年			
国公立大学	90.0	58.0	6.1
私立大学	5.6	17.0	9.1
短期大学	0.0	8.0	2.4
専門学校・各種学校	1.2	6.6	15.5
家事・手伝い	0.4	0.0	1.3
就職	2.8	10.0	64.3
フリーター	—	—	—
その他	—	—	—
無回答	0.0	0.4	1.3
1997年			
国公立大学	83.6	71.0	8.3
私立大学	6.8	11.4	11.7
短期大学	0.4	3.4	8.0
専門学校・各種学校	1.6	6.6	24.0
家事・手伝い	0.0	0.4	0.5
就職	2.8	4.6	42.7
フリーター	—	—	—
その他	—	—	—
無回答	4.8	2.6	4.8
2009年			
国公立大学	88.8	85.8	13.3
私立大学	6.8	7.2	8.8
短期大学	0.0	0.8	5.6
専門学校・各種学校	0.8	4.2	20.3
家事・手伝い	0.0	0.0	0.3
就職	0.8	1.0	46.1
フリーター	1.2	0.4	0.5
その他	0.8	0.4	3.7
無回答	0.8	0.2	1.3

#### 3) 社会階層と進路志望

社会階層を表わす変数として父学歴をとりあげ、生徒の進路志望の変化を示したものが、表3-3である。父親が四大卒か否かによって、四大進学を志望する比率に大きな差があることがわかる。79年と97年の間で、父学歴別の大学進学志望比率に大きな変化は見られなかったが、97年から09年にかけて、国公立大志望は父非四大卒で6ポイント、父四大卒で11ポイントも上昇している。

表3-3 進路志望の経年変化(父学歴・年度別、%)

	父四大卒	父非四大卒
1979年		
国公立大学	66.2	45.5
私立大学	16.2	10.9
短期大学	2.5	4.5
専門・各種学校	5.9	8.8
家事・手伝い	0.5	0.6
就職	8.8	28.9
フリーター	—	—
その他	—	—
無回答	0.0	0.7
1997年		
国公立大学	64.9	47.4
私立大学	15.7	8.3
短期大学	2.0	5.0
専門・各種学校	7.3	13.6
家事・手伝い	0.3	0.4
就職	5.9	22.5
フリーター	—	—
その他	—	—
無回答	3.9	2.7
2009年		
国公立大学	75.8	53.0
私立大学	9.6	6.5
短期大学	1.4	2.5
専門・各種学校	6.1	11.0
家事・手伝い	0.0	0.2
就職	4.2	24.3
フリーター	1.2	0.2
その他	0.9	1.8
無回答	0.7	0.5

#### 4) 小括

①97年から09年にかけて、大学(とりわけ国公立大)進学を志望する生徒の比率が、上位校(普通科)と中位校(普通科)の間でかなり縮小した。一方で、普通科と専門校の間の差が確認された。分析対象とした9校については、生徒の大学進学志望の観点からすると、普通科においては、その選抜機能を失いつつあるといえるかもしれない。おそらくその背景には、2000年代の高大接続をめぐる変容があると思われる。

②クロス集計による単純な分析に過ぎないけれども、生徒の進路志望に対する社会階層(父学歴)の影響は、年度を超えて存続していると思われる。父四大卒/非四大卒ともに、97年から09年にかけて国公立大志望が大きく増加するものの、その差はやや拡大していた。

報告時には、上記を踏まえたうえで、性やエリアなどの変数を統制した多変量解析等を行うことで、高校ランク(さらにその背後にある社会階層)が生徒の進路志望にどう関与しているのかについて、より精緻な分析結果を示したい。(岡部悟志)

#### 4. 学習へのコミットメントの変化

以下では、学習へのコミットメントの変化を検討するために、学校外での学習時間と、学習意識の変化を分析する。まず、学校外での学習時間を調査年別に示した表4-1をみると、勉強時間の平均値は79年から97年にかけて大きく減少した後、09年にふたたび増加しているものの、79年の水準には届かない。また、カテゴリ別の分布状況をみても同様であり、「ほとんどしない」は、いったんは79年から97年にかけて大きく増加したが、09年にはその増加分の半分程度を戻している。「3時間以上」「4時間まで」と「4時間以上」の合計)についても、同様である。

表4-1 学校外での勉強時間(%,分)

	79年	97年	09年
ほとんどしない	21	33	27
30分まで	8	8	9
1時間まで	13	14	14
2時間まで	21	17	15
3時間まで	19	18	22
4時間まで	12	6	10
4時間以上	6	2	2
平均値(分)	100.0	73.5	85.7
標準偏差	81.7	73.1	75.4
N	(1119)	(1115)	(1119)

表4-2 学習意識(年度別、%)

	79年	97年	09年
A 先生の授業を熱心に聞いているほうだ	37	47	67
B 授業でわからない点は、いつまでもそのままにしておかないほうだ	34	36	47
C 高校での勉強は、自分の興味・関心にあわないものが多い	55	58	49
D 先生の授業の進め方が早すぎて、ついていけない科目が多い	37	45	41
E 先生や親の期待にこたえるために、勉強しなければならないと思うことがある	66	49	53
F 授業がきっかけとなって、さらにくわしいことを知りたくなることがある	60	48	51
G どうして、こんなことまで勉強しなければならないのかと疑問に思うことがある	71	82	81
H 試験が終わると勉強したことをすぐ忘れてしまうほうだ	80	83	79
I 教科書の内容がむずかしすぎて、ついていけない科目が多い	31	44	39
J いくら勉強しても、大切なものが身についていないと思うことがある	84	85	73

注)いずれも「はい」と回答したものの比率(%)。

次に、表4-2より、学習意識を検討する。年度を超えて共通するのは、7～8割程度の高校生が、「G どうして、こんなことまで勉強しなければならないのかと疑問に思うことがある」、「H 試験が終わると勉強したことをすぐ忘れてしまうほうだ」、「J いくら勉強しても、大切なものが身についていないと思うことがある」と感じていることである。そして、「D 先生の授業の進め方が早すぎて、ついていけない科目が多い」や「I 教科書の内容がむずかしすぎて、ついていけない科目が多い」と感じる高校生が、3～4割程度を占める。「単線型」トラッキング・システムの正統性は、生徒の学習意識によって、一貫して問われ続けていると言えるだろう。

しかし、この30年ほどの間で生じた変化に注目するならば、「A 先生の授業を熱心に聞いているほうだ」と回答する生徒が大幅に増加していることに気づく。また、「B 授業でわからない点は、いつまでもそのままにしておかないほうだ」と回答する生徒の比率も、同様に09年において最も高く、「C 高校での勉強は、自分の興味・関心にあわないものが多い」や「J いくら勉強しても、大切なものが身についていないと思うことがある」の比率は09年において最も低くなっている。したがって、生徒の意識のレベルでは、学習に対して肯定的な方向に変化している側面があるとは言えるだろう。

とはいえ、「E 先生や親の期待にこたえるために、勉強しなければならないと思うことがある」という生徒が減少していることからうかがえるように、生徒たちから学習指導への関与を調達することが以前よりも容易になっていると言いはし難い。また、「F 授業がきっかけとなって、さらにくわしいことを知りたくなることがある」が79年より減少し、「G どうして、こんなことまで勉強しなければならないのかと疑問に思うことがある」については79年より若干ながら増加している。さらに、「H 試験が終わると勉強したことをすぐ忘れてしまうほうだ」と感じる生徒が変わらず大多数であることを併せて考えるならば、学習に対して道具的にも表出的にも意味を見いだせない傾向が若干ながら強まっていることがうかがえる。

こうした全体的な傾向のもとで、学校ランクや卒業後の進路希望、出身背景(社会階層)によって、学習へのコミットメントの変化の仕方はどう異なるのか。また、これらの変数が学習へのコミットメントに及ぼす影響は、どのように変化しているのか。こうした分析をもとに、高校階層構造の選抜機能および正当性への懐疑の変化について検討する。(堀健志)